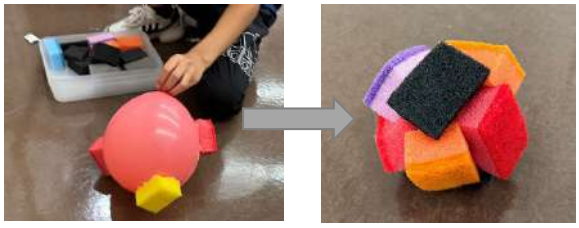
CHIYODA Creative ART Lab for Children
千代田クリエイティブ・アートラボ

金田　卓也　教授
（家政学部　児童学科）

千代田クリエイティブ・アートラボの活動も順調に３年目を終えることができました。毎月１回平日の午後を中心に活動を続けてきました。毎回コンスタントに参加している子どもたちはいろいろな素材を使って自分のつくりたいものを自由につくることのできるこのアートラボでの活動をとても楽しみにしています。18：00 過ぎに母親が迎えに来ても、つくることに熱中している子どもたちはみんななかなか帰りたがらないでいます。

この活動を始めた頃はまだ保育園児だった子ども小学生になり、小学生だった子は中学生になり、子どもたちの成長と共にプロジェクトを継続してきたことの意義を改めて感じる１年でした。ドレスがつくりたいと言って、ポリ袋に顔や腕が出せる穴を開けて、シールを貼ったり油性ペンで描いたりして装飾したものを１人でつくって遊んでいた保育園児もスタッフのサポートにより自分で糸と針を使えるようになりました。自分でつくりたいもののイメージをずっと持ち続け、成長するに従って、いろいろな＜つくる＞技術を身につけていることがわかります。

アートラボでの子どもたちの素材と関わる＜つくる＞活動はひとつの探究のプロセスであることに気がつきます。小学６年生の男の子はゴム風船を成型用の土台にした麻紐だけでできたボールをつくるために空気を入れたゴム風船の一部に紙ガムテープを貼り、紙ガムテープ部分に竹串を刺しても空気が抜けない実験を何度か行い成功させました。カラフルなスポンジボールをつくったときにも、スポンジ同士を直接接着すると最終的に球体にすることが難しいためにゴム風船を介して接着することを試みました。小学校１年生と２年生の２人の女の子はかき氷をつくるために綿に色水をかけていましたが、物質の特徴や液体の濃度や物質の特徴を探る理科の実験とも重なります。そうした意味でも、アート・ラボ（実験室）という言葉はふさわしいといえるでしょう。









今年度は、ネパールのムラバリ村をオンラインで繋いでクリエイティブ・アートラボの拡大版として村の子どもたちとのアートワークショップを実施することができました。ムラバリは2015年のネパール大地震のときに震源に近く壊滅的な被害を受けた村でそのときから、このアートラボに関わっている大妻女子大学の児童学科の教員たちが支援活動を続けてきたところです。現地の学校の教員であるリラ・バハドゥール・ビシュワカルマ先生とは、これまでもさまざまなアートプロジェクトを共同で行ってきました。そうしたビシュワカルマ先生にコーディネイトしてもらって、オンラインによるクリエイティブ・アートラボが実現しました。

画材などほとんど手に入らないこの村では身近なところにある石や竹といった自然素材を積極的に活用することにしました。壁に塗るアクリルペンキで石に絵を描いたり、端切れを集めて人形をつくったり、子どもたちはオンラインでのきっかけにクリエイティブ・アートラボの活動を時間の枠を超えて楽しみました。

村の学校では、日本の図工のような科目はありませんが、生活の中でいろいろな道具の使い方に慣れているといった一面もあります。自分のアイデアやイメージを目に見える形にしていく＜つくる＞活動に熱中する子どもたちの姿は日本でもネパールでも変わるところはありませんが、素材や道具が簡単に手に入る日本と、接着剤ひとつをとってもなかなか手に入らないネパール村とで子どもたちを取り巻く環境が大きく異なることも事実です。そうした違いから学ぶこともたくさんあります。

今回、ふたつの地域でのクリエイティブ・アートラボの活動を行いましたが、＜地域＞という言葉をキーワードに日本の子どもたちとネパールの子どもたちをつなぐことができれば、ほんとうに素晴らしいことだと感じました。







